

# チュルゴとグラスランの主観価値理論

山本英子

## I 序論

チュルゴ (Anne Robert Jacques Turgot, 1727-81) は、『商業、貨幣流通と利子、諸国家の富にかんする著述プラン』(1753-54, 以下『プラン』と略) 及び、『富の形成と分配にかんする諸考察』(1766, 以下『諸考察』と略) 等の著作で、ケネー (François Quesnay, 1694-1774) が提唱した土地生産物のみを生産的であると見なす純生産物観を説いたが、彼はまた、『価値と貨幣』(1769?) において主観価値理論を提示した。未刊の草稿として残されたこの『価値と貨幣』<sup>1)</sup> は、彼の死後、デュポン (Du Pont de Nemours, P. S., 1739-1817) によって発見され、全集に加えられて 1808 年に初めて公にされた。その後、『価値と貨幣』は、18 世紀における限界効用概念の萌芽が見られる著作として象徴的に採り上げられてきた (Gide et Rist 1926, 54 / 訳 69. Kauder 1965, 27-28 / 訳 34-35)。メンガー (Carl Menger, 1840-1921) も、『国民経済学原理』(1871) でチュルゴについて度々言及しているだけでなく、所有していたチュルゴの『価値と貨幣』<sup>2)</sup> に数多くの書き込みを残していることから、チュルゴの議論を参照した形跡がうかがえる。

しかし、純生産物の価値を説くチュルゴの他の著作での主張と、『価値と貨幣』での主観価値論との間には隔たりが存在するのであり、彼が何らかの理論的な影響を受けたことが推察できる。実は、チュルゴにその影響を与えたと見られるのが、『価値と貨幣』に先立って主観価値をより詳細に論じていたグラスラン (Jean-Joseph-Louis Graslin, 1727-90. フランス語では「グララン」と発音) の『富と租税に関する分析試論』(1767, 以下『分析試論』と略) である。彼らの接点は、グラスランの『分析試論』が、「間接税が土地所有者の収入に及ぼす効果の論証と評価」というテーマでチュルゴが主催した 1766 年の公募論文に提出されたことから始まった。純生産物への土地単一税を正当化する論文が応募されることを期待していたチュルゴの思惑に反して、グラスランが論じたのは、フィジオクラシー政策への批判と新たな税制度の提言であり、その根拠となる主観

---

1) 『価値と貨幣』は百科事典の一項目としての依頼に応じて書かれたもので、百科事典の計画が頓挫したため、未刊の草稿として残された。

2) 一橋大学社会科学古典資料センター、メンガー文庫所蔵。

価値理論に論文の大半が費やされていた。チュルゴはグラスランの論文に対して二等賞に該当する評価を与えながら、フィジオクラートの立場から厳しい反批判を行った (Turgot [1767] 1909)。

ところが、その後の 1769 年頃に執筆されたと推定される<sup>3)</sup>『価値と貨幣』で、チュルゴはそれ以前の著作の『プラン』、『諸考察』等とは異質の主観価値理論を展開し、その新たな論拠がガリアーニ (Ferdinando Galiani, 1728-87) とグラスランであることも仄めかした (後掲 II.3 項の引用文を参照)。確かに、従前から接点を持つガリアーニの主観価値論からの影響を考慮できるとしても、それ以上に、グラスランを知らずには成立しなかったと考えられるほど、『価値と貨幣』はグラスランの主張に接近したものになっている。

この関連を具体的に提示したのが、手塚 (1933) である。手塚が、チュルゴの『諸考察』までの諸著作と『価値と貨幣』との内容の隔たりを強調し、チュルゴの主観価値論がグラスランの主張から強く影響されていることを、グラスラン研究の黎明期に独自に「証明」した点については、大いに評価出来る。手塚が行った証明にさらに論点を加えて補強を行うことは、本論の目的の 1 つである。また、山川 (1968) は、「ガリアーニ → チュルゴ → コンディヤック」という Gide et Rist (1926) が提示した主観価値についての系譜を否定し、「ガリアーニ → グラスラン → チュルゴ」という継承順だと提示して、グラスランの学説史上での位置付けの再認識を促した (山川 1968, 169-72) 点で貢献した。

一方、チュルゴの『価値と貨幣』に対しては限界効用概念の萌芽の有無について議論される (Hutchison 1988, 308-21; 川俣 2010) が、グラスランの『分析試論』での主観価値理論に対しては、平均価値を交換価値としたにすぎず、限界概念には到達していないと解釈されている (山川 1968; 米田 1998)。しかし、総価値を一定と想定した上で、財の数量が増加したときの価値の変化についての概念を表明したグラスランの理論は、同じように総価値を一定とした部分価値で尊重価値を表明したチュルゴより、限界効用逓減を認識していたと解釈し得るのである。限界効用の認識度について彼らを比較し、グラスランの明示性を提示することが、本論のもう 1 つの目的である。これにより、チュルゴに比べるとはるかに限定的にしか知られていないグラスランの『分析試論』も、主観価値理論の発展経緯における議論の俎上に載せるべき重要性和先駆性を持つことが、改めて認識され得よう<sup>4)</sup>。

以下、チュルゴの『価値と貨幣』とそれ以前の諸著作との間における変化が、グラスランの理論を自らの理論として採り入れることによるものであることの新たな証明と、彼らの記述を比較することで提示される限界効用概念の認識度の差異とを、次のように構成しながら明らかにする。本節に続く第 II 節ではチュルゴの、第 III 節ではグラスランの、各主観価値理論の概要を述べ、第 IV 節ではグラスランとチュルゴとの関連について、富、絶対価値、交換価値、そして限界価値<sup>5)</sup>の認識度という 4 つの観点から比較を行い、第 V 節で結論を述べる。

3) グラスランの『分析試論』から問を置かず、1768 年には『価値と貨幣』が執筆されていたであろうという主張もある (手塚 1933 他)。

## II チュルゴの主観価値理論

チュルゴは、フィジオクラシーの体系的構造を敷衍しながらも、ケネーやミラボーらと完全に一致する思想を持っていた訳ではなかった。後にグラスランからの影響を受けるまでは、「レッセ・フェール」(*Laissez-faire*)を唱えたグルネと、その同義の「至高の手」(*Suprema Mano*)に導かれるとしながら主観価値理論を説いたガリアーニからの影響もあった。それらを踏まえ、以下で採り上げる3著作を通じて、チュルゴがフィジオクラートの立場を保ちつつ主観価値への認識を変化させた過程を探る。

### 1. チュルゴの思想の背景

一般にチュルゴは、ケネー、ミラボーらと共にフィジオクラートの一人として認識される。ケネーは、コルベルティスムの政策以降、フランスの農業が衰退し経済が疲弊しているのは、経済政策において自然的秩序が認識されていないからだと考えた。そして、収穫された土地生産物の種子が翌年成長して新たな生産物となる循環を繰り返すように、毎年の土地生産物の一部を、翌年も生産を行う耕作者の糧とする再生産に充てる自然的秩序に基づいて、農業を復興させなければならない(Quesnay [1765] 1888)と主張する。

ケネーは、土地生産物は、再生産費も含めた費用価格である「根本価格」を越える超過分、つまり、土地所有階級の収入である「純生産物」を生み出すから「生産的」であるとするが、土地生産物を加工する工業は、材料費となる土地生産物の根本価格に加工労働者の賃金分が費用として加わり市場価格となるとしても、その賃金分は労働者が生活資料の購入に充ててすぐに消費するので、結局、加工工業は根本価格を越える純生産物を生み出さないため「不生産的」であると見なすのである。

ケネーのこの見解を踏襲するチュルゴには、グルネの影響もあった(Turgot [1759] 1909)。グ

---

4) グラスランに比べチュルゴの研究は多く、例えば、Erreygers (1989)は、『価値と貨幣』の新古典派的定式化により、チュルゴの交換理論の不成立性と、効用最大化原理の欠如を指摘する。Ravix et Romani (1997)とMurphy (2009)は、『諸省察』でのチュルゴの思想に重点を置くが、『価値と貨幣』については言及しない。Brewer (2010)は、チュルゴとスミスとの関係を、Jessua (1991)は、チュルゴとカンティロン、ケネーとの関係を論じる。一方、Groenewegen (2002)は、グラスランについては、山川と津田の著作を通してしか認識していない。山本 (1928)はチュルゴにジェヴォンズの無差別の法則との関連性を指摘した。

一方、グラスランに対しては、Desmars ([1900] 1973)はスミスの先駆者、Dubois (1911)はリカードの先駆者とし、Orain (2006)ではワルラスの一般均衡への先駆性を指摘したが、Maherzi (2008)はワルラスとの関連を否定し、スミス、エンゲルス、ヴェブレンとの関連性を主張し、グラスランの貨幣数量説からフィッシャー、フリードマンへと演繹する。注25も参照。

5) 本研究では、チュルゴやグラスランの認識に合わせ、「限界効用」を取って「限界価値」と呼ぶ箇所もある

ルネは農業以外の加工業も土地生産物と同じように生産的であるとしていたものの、土地生産物が経済活動全体における第一次的なものであると考え、「すべての租税は、…、常に土地所有者によって支払われる」(Turgot [1759] 1909)というフィジオクラートの思想も持っていた。一方、商業監督官であったグルネの「成すがままにさせ、過ぎゆくままにさせよ、世の中は独りでに動いていくのだ」(Laissez-faire, laissez-passer, le monde va de lui-même)という「レッセ・フェール」思想は、「国内商業の自由主義者であって自由貿易主義者ではないことから自由主義的保護主義」(手塚 1933)であった。ケネーも「商業の自由競争による流通と、商業自体は区別すべきで、排他的特権などは自由競争を妨げることもあるが、商業自体を妨げる訳ではない」(Quesnay [1766] 1888, 463)として、規制や排他的特権が存在する現実を容認している<sup>6)</sup>。このような主張の二人の影響下で、チュルゴは純生産物観と自由主義観を受容していた。

そして、チュルゴの主観価値理論にまず影響を及ぼしたのが、ガリアーニである。ガリアーニの効用価値理論を育んだイタリアの、特にナポリ学派の経済学者たちは、スコラ哲学的な自然状態への模索と共に実用的な経済理論を志向したため、効用性と希少性にも目が向けられていた。ガリアーニ自身は、経済政策は自然法に従うべきで、経済の成り行きは「至高の手」に導かれる(Galiani [1751] 1803, 92)と考えていた。また、1759年から69年までのフランスでの赴任中<sup>7)</sup>、彼はフィジオクラシーの自由競争的な面への共感を示していたが、帰国後に著した『穀物取引に関する対話』(1770)以降は、明確に反対の立場をとることになる。

ガリアーニは『貨幣論』(1751)の中で、人間のさまざまな欲求状態と物の希少性とに対応して物の価値が変化することや、第1次、第2次などの欲求に対応する種類ごとにその対象物の欲求が満たされると、別の対象へと欲求が移り替わることや、人間の欲求には際限がないことなど、主観価値理論の主要な点を提示した<sup>8)</sup>。しかし、一方でガリアーニは、自然の不可抗力に左右されない財には、労働人数、労働時間、各人の報酬差を考慮した労働のみが価値を与える、という労働価値説をも述べているため、効用理論との二面性が指摘できる<sup>9)</sup>。

次に、チュルゴの『プラン』、『諸考察』そして『価値と貨幣』を時系列に俯瞰し、主観価値が

6) 規制や排他的特権を認めていたケネーもまた、国家を豊かにする農業を繁栄させるためには自由貿易が必要であるという見解であった(小池 1981, 60-61)。ケネーが経済学者として認識されるのは1756年以降であり、グルネの健康状態は1754年以降悪化していったことから、生前のグルネがケネーと直接接触した可能性は低いが、グルネの思想がケネーに影響を及ぼした可能性は指摘できよう。

なお、グルネが主張した「レッセ・フェール」思想は、既にイタリアに「商業の自由」(liberta di commercio)という形で存在しており、後にスミスにも受け継がれる。

7) 当該期間、ガリアーニはナポリ王国の駐仏公使館書記官であり、チュルゴとも親交を持っていた(山川 1968, 200)。

8) シュンペーターは、「ガリアーニをジェヴォンズやメンガーから隔てるものは、ガリアーニには限界効用の概念が欠けていることである」と述べている(Schumpeter 1954, 301 / 訳 545)。

一方、川俣は、「ガリアーニは総効用と限界効用の区別が明示されておらず、厳密には限界効用の概念の形式にも至っていない。しかし、…確かに限界効用理論の萌芽と呼ぶにふさわしい」ものがあると述べている(川俣 1988, 152)。

どう述べられているかを示す<sup>10)</sup>。

## 2. 1767年までのチュルゴ

チュルゴが請願審議官としての実務に臨み始めた時期に書かれた『プラン』は、タイトルが示すように完成された著述ではない。「全体のプラン」、「所有権」、「貿易商人」、「商業の自由に対する障害、規制価格」の4つの部分に分けて書かれているその主旨は、価格規制を撤廃して市場の自由な競争に任せれば、売手の供給と買手の需要によって価格が決定されることを示そうとしたことにある。

最初の「全体のプラン」は、貨幣の中立性、為替とその流通や利子、ロー体制批判、工業に対する農業の優先性や奢侈についてである。この中でチュルゴは、「国の富とは人間の数である」としたすぐ後で、「有用物の生産のみが富である」(Turgot [1753-54] 1909, 377)としているが、国民の数が多ければ有用物の生産量である富が増加することを意味していたと推測できる。

次の「所有権」では、交換する2物について、それぞれが所有物であり欲望物であるという点から、これらを4つの物と見立て、それらが互いに等価となるように交換が成立されると説明し(Turgot [1753-54] 1909, 379)、その後の「貿易商人」は、その定義と特徴を短く示した。

最後の「商業の自由に対する障害、規制価格」では、価格決定について述べており、小麦価格が一定であるのに、その加工品であるパンの価格が、地域ごとに異なる規制価格となっていて高止まりしていることを批判し、その根拠として次のように価格を分類して提示する。

まず、多数の買手と売手の間での利益が釣り合うのが「共通価格」(prix commun)であること、そして、売手全体の供給と買手全体の需要で決まるのが「流通価格」(prix courant)または「市場価値」(valeur vénale)であること、また、売手の生産費用及び費用価値が「根本価格」(prix fondamental)及び「根本価値」(valeur fondamentale)であること<sup>11)</sup>を示した上で、「自然価格」(prix naturel)」というものは存在しないとす。

コルベルティスムのために、輸出工業が優遇され、農産物については安価に抑えられて衰退したフランスの農村での混乱と困窮は、18世紀も続いていた。売手は少なくとも生産費である根本価格以上でなければ売ろうとはしないはずなのに、農産物の低価格政策によって生産費である

9) 山川は、チュルゴの『価値と貨幣』の中でも、主観価値理論と共に労働を価値尺度とする見解が混在していると指摘している(山川 1968, 216)。

10) 津田(1962b, 4-5)によると、チュルゴのテキストには、デュボン版、デール版、シェル版の3種類がある。デュボン版は、チュルゴの原稿に多くの改稿・削除・脚注を加えており、デール版は、デュボン版の歪曲性が踏襲されている。今日の学術的標準版となっているのがシェル版で、デュボン版とデール版の誤りや歪曲性を修正したものである。デュボン版には『プラン』は存在しない。なお、本研究でもシェル版を引用元としたが、一橋大学社会科学古典資料センターのメンガー文庫所蔵のデール版『諸考察』と『価値と貨幣』も参照した。

11) 津田は、prix communを「平均価格」、prix courantを「通用価格」、valeur vénaleを「売上価値」、prix fondamental及びvaleur fondamentaleを「基本価格」及び「基本価値」と訳している。

根本価格にも満たない価格に規制していたのでは、農産物の生産自体が不可能になるとチュルゴは主張する。そして、規制価格や独占がなくなれば、自由な価格競争によって売手と買手にとっての適正な価格が生産費で決定されると述べる。(Turgot [1753-54] 1909, 385)。

このように、重農派を形成しつつあったケネーらと既に交流していた時期の『プラン』は、グルネの提唱した自由主義を標榜し、費用価値説を根拠として、農産物の価格規制撤廃を主張したものだ。

また、グラスランを知る直前に書かれたチュルゴの代表的著作である『諸考察』<sup>12)</sup>は、全体が100節に分けられ、フィジオクラシー思想に基づいて階級、商業、貨幣、資本、利子、企業家、資本家などについて述べられているが、その中の第30～32節の価値尺度について書かれた部分には主観的記述がある。

チュルゴは『プラン』と同じように、この『諸考察』でも、交換価値について価格の種類を挙げながら説明する。彼によれば、2個人間でも多数間でも、交換価値は売手全体と買手全体の相互の欲求と能力<sup>13)</sup>との均衡によって決定されることになり、その結果、さまざまな需要と供給の間の「中間価格」(prix mitoyen)<sup>14)</sup>が「流通価格」(prix courant)になると説明する。

チュルゴは価値と価格を同義語と見なし<sup>15)</sup>、『プラン』でのようにさまざまな価値や価格を提示するが、結局のところ機能的にはケネーが示した根本価格と市場価値の二分類に収束する。彼らの違いは、ケネーは、土地生産物にはいつでも超過需要である純利益が存在するものとして論じる(Quesnay [1766] 1888, 102-03)が、チュルゴは、市場価値は生産量と自由な競争によって決まると説明するところにある。しかし、チュルゴはまだ、主観的尺度を自由な競争の前提としての限定的な扱いでしか用いなかった。

それでも、この『諸考察』全体は、国家の富についての持論から、貨幣の市場利子率が市場全体に及ぼす効果の認識についてまでが、歴史的視点と共に盛り込まれており、フィジオクラシーの思想に基づく国富論ともいべき形となっており、ケネーとグルネの思想とを融合して受容し

12) チュルゴの『諸考察』は、ボードー (l'Abbé Baudeau) によって 1765 年から刊行されていた『市民日誌』(Ephémérides du Cityen) の 1769 年第 11 巻、第 12 巻、1770 年第 1 巻に、『X 氏による富の形成と分配に関する諸考察』というタイトルで 3 回に分けて掲載された。しかし、デュポンによってチュルゴが書いた節が削除されたり、デュポン自身の別の節が加えられたりするなど、かなりの改変が行われたため、チュルゴは正誤表と共に「1766 年 11 月」の日付を記載した別の正本を 1770 年に出し、1788 年に再版もされた。

13) チュルゴは、第 31 節では「交換物の価値は、相互の釣り合った欲求または欲望以外の尺度を持たない」と述べるが、続く第 32 節では「交換物の価値は、相互の欲求と能力との釣り合いによって決定される」と言い換え、「能力 (faculté)」という条件を加えている。

14) 津田氏の訳では、『プラン』において“prix commun”を「平均価格」としていることは注 10 で指摘したが、『諸考察』第 32 節のこの“prix mitoyen”も「平均価格」と訳され、第 36 節の“valeur commune”も「平均価値」としている。結局は平均的な価格に収束する可能性があるとしても、“commun”、“mitoyen”共に「平均」の意味はないことを付言しておく。

15) 「価格は常に価値を表明するものである」(Turgot [1769?] 1909, 95)。

たチュルゴの経済体系観を見ることができる。

### 3. 『価値と貨幣』(1769?)

反フィジオクラシーのグラスランの論文を自ら選出し、グラスランを反批判(Turgot [1767] 1909)した後に著された未完の草稿『価値と貨幣』で、チュルゴは、『諸省察』までで採り入れた主観的記述から、学説史的評価を受けるに足る主観価値理論への転換を示すことになる。グラスランの『分析試論』の影響は後段に譲り、『価値と貨幣』で述べられた彼の主観価値理論の要旨を示す。

まず、チュルゴは、貨幣は価値の尺度を表すものであり、貨幣もまた別の貨幣によって測られること、そして財とは、欲求充足の対象物であるという定義を述べてから、孤立人<sup>16)</sup>についての価値を次のように論じる。

価値とは、人間の欲求を満たす物の性質であり、孤立人にとっての唯一の物に対しても価値の評価は生じる。更に、複数の物が存在する場合には、各々の価値の比較が起こり、人間の欲求の変化に応じて各価値の評価もまた変化する。チュルゴは、人間の欲求との関係を示す物の「適性」(la bonté)と、欲求の切実さによる「効用の序列」(ordre de utilité)における「物の卓越性」(excellence de la chose)と、入手のための困難がどの程度かという「希少性」(la rareté)を、価値形成に協働する3要素とよび、それらに基づく評価が「尊重価値」(valeur estimative)であるとした。その効用の序列の中では、欲求の総量、享有の総量、能力の総量が一定であり、人間は欲求の重要度に応じて能力を配分することになる<sup>17)</sup>。チュルゴはこれを総括して、尊重価値とは、1人の人間の能力全体に対して、その人間がある対象への欲求満足のために用いる能力の比率であるとする。

この記述の後、チュルゴはガリアーニとグラスランの名前を挙げ、次のように言及する。

ガリアーニ氏が『貨幣論』の中で『あらゆる価値の共通の尺度は人間である』と述べて明らかにしたのと同じ真理が、『富と租税に関する分析試論』という題名で最近発表された書物の著者によっても漠然とほのめかされ、『常に単位によって表現され、個々の全ての価値はその比率的部分にすぎない、一定不変の唯一の価値』についての彼の学説が誕生したようだが、この学説には真実と誤りが混じり合っているので、ほとんどの読者には難解だろう。

(Turgot [1769?] 1909, 88, 傍点は引用者)

ここでチュルゴが言及した「最近発表された書物の著者」とはグラスランのことであり、チュルゴは、この草稿で述べる内容に、ガリアーニとグラスランの主観価値理論が関連することを示

16) チュルゴは「孤立人」を交換のない社会状態の個人の意味で用いている。

17) チュルゴの記述に対する手塚の解釈には、やや曲解的な面がある。チュルゴは「人間とは人の欲望を意味する」、「人の欲望の全体が人である」(手塚 1933, 216)とは述べていない。

している。この後、チュルゴは、2 者間での交換の場合、各人が持っている物と入手したいと思う物に対する優越性を互いに比較し、更に、優越した尊重価値どうしを比較することで「平均尊重価値」(la valeur estimative moyenne) が決定され、これが「交換価値」(la valeur échangeable) であると説明した上で、またこれを「評価価値」(la valeur appréciative) と言い換える。そして、交換対象の一定部分量どうしの比率で表すのが「価値の表明」であり、物の価格となるとチュルゴは述べる。

以上のように、『プラン』及び『諸考察』に登場していた「共通価格」、「流通価格」、「市場価値」、「中間価格」、「根本価格」などの語は、『価値と貨幣』では姿を消し、その代わりにチュルゴは、「尊重価値」、「平均尊重価値」、「交換価値」、「評価価値」という新たな語によって主観価値を説明した。

### III グラスランの主観価値理論

一方のグラスランは、フィジオクラシーによる政策が経済活動を行う階級を生産的と不生産的とに分類し、生産的とした農業による純生産物のみを課税対象とすることに反対していた。そして、全ての富が人間の欲求とその対象物の希少性による主観的価値を持つことを根拠として担税範囲を押し広げた上で、担税能力に応じた税制度の実現を訴えた。グラスランの主観価値理論は難解な点もあるが、彼はフィジオクラシーの生産的・不生産的という二元的な富の分類を退け、欲求と希少性の複合によって決定される価値によって富全体の体系が構成されることを示したのである。

#### 1. グラスランの著述と思想

先に序論で示したとおり、公募論文に「間接税が土地所有者の収入に及ぼす効果の論証と評価」というテーマを指定したチュルゴとしては、どんな税も、結局は転嫁して土地純生産物に帰着するという論旨を期待していたが、その思惑に対し、グラスランは次のように反対する。

間接税は支払った人の負担だけになるのだから、間接的ではなく非常に直接的であるし、最終的にその税負担が帰する実際の納税者は、必ずしも土地所有者ではない。税とは、いかなる階級のものであれ、市民が国家に与える彼の富の一部なのだから、もし、全ての税が結局は土地所有者に帰するということが本当だとすると、土地所有者が本質的に富の唯一の所有者でなければならないだろう。(Graslin [1767] 1911, 4)

実質的な富のみが税を支払うことができるのだから、さまざまな税を負担することになるのは誰なのかを知るためには、何がその富を成しているのか、そして、富は誰の手中にあるのかをしっかりと見分けることが不可欠だ。(Graslin [1767] 1911, 8)



グラスランにとって富とは、人間の欲求を満足させるように定められた全ての物、即ち、欲求と希少性それぞれの度合に応じて相互に相対価値を持つ全ての欲求対象物であり、価値とは、各欲求の間の異なる度合と、各欲求対象物の希少性と、各欲求を満たすための困難さの結果として生じる相対的な比率である (Graslin [1767] 1911, 24, 51)。また彼は、土地純生産物だけを富とするのがミラボー<sup>18)</sup>らの主張だと指摘した (ibid., 5-6)。

グラスランの主張は、国家収入の増加を図るにはどうすべきかを説くこと、すなわち、「執拗にもっぱら土地の富の中にだけあるとされてきた国家収入を、大いに拡大」(Graslin [1767] 1911, 21) し、富または収入と見なせる範囲を広げることで、担税能力の範囲も押し広げることであった。そのために、彼は、税を払い得るのは純生産物だけだというフィジオクラートの主張を主観価値理論によって否定し、課税の根拠を示さなければならなかったのである。

## 2. グラスランの価値理論

グラスランにとって欲求とは、「充足感に対する愛着の変化」(Graslin [1767] 1911, 35, note 1)<sup>19)</sup>であり、絶対価値 (la valeur absolue) とは「人間の欲求だけに依存する物の属性」(ibid., 33, note 1)、つまり「ある人間にとってのある物の価値」(ibid., 69, note 1) であり、富とは「必要性 (la nécessité)、効用性 (l'utilité)、嗜好 (le goût) などから、その価値を得ている物」(ibid., 49) であると説明する。

彼の見解では、物の価値は、それに対応する欲求という原因によって増えたり減ったりするのであり、費用が直接その物の価値を増やすのではないが、費用が増大する場合は、大きな費用をかけ得る状況自体が希少であるから、その希少性が価値を増やすと見なすのである (Graslin [1767] 1911, 23 note 1)。

グラスランはまた、各欲求対象物について、人間の生存のための重要度が高い物から低い物へ、いわば自然法的な規範度合による欲求の序列に従った種類価値の体系として「富の序列」(l'ordre des richesses) を提起する<sup>20)</sup>。また、その富の序列の中で交換が想定される場合には、絶対価値を直接価値 (la valeur directe)——即ち、その対象物が欲求の度合として富の総量に対して持つ比率と、その当該部分の希少性とから複合的に決まる二重の比率——に読み替え、この直接価値どうしの比率が市場価値 (la valeur vénale) または相対価値 (la valeur relative) だと説明する (Graslin [1767] 1911, 31, 49, 69 note 1, 266 note 1)。

欲求と希少性との複合的な比率という彼の説明は、具体的にどう解釈できるだろうか。富の序

18) グラスランの『分析試論』では、主にミラボーの『課税の理論』(1761)を批判の対象としている。

19) またグラスランは、欲求には、人間の本能的性質からの自然欲求と、文明の発達が生み出す人工的欲求があるが、欲求対象物としての市場価値を考慮する場合には、この2つは同じ性質だと述べる。

20) グラスランのこの富の秩序という概念は、ガリアーニが「人間はある欲望が収まるや否や、同じ強さの欲望が生まれる」(Galiani [1751] 1803, 61)と述べた欲求や感情の種類を序列を発展させたものと考えられる。

列における対象物 1 と対象物 2 それぞれの欲求を  $A, B$ , それらの各部分を  $\alpha, \beta$  と想定し, 彼の表明を例示すると以下のようなろう。

まず, 対象物 1 と対象物 2 の間には, 互いに富の序列全体の中で, 「 $A/(A+B) : B/(A+B) = A : B$ 」という欲求比である種類価値の比が存在する。そして, 2 つの対象物の個々の部分は, 互いに「 $(\alpha \text{ の量}/A \text{ の量}) : (\beta \text{ の量}/B \text{ の量})$ 」という各対象物の中での希少性の比が存在する。

仮に, 対象物 1 の欲求量と存在量がそれぞれ 100, 欲求部分量とその存在量がそれぞれ 20, 対象物 2 の欲求量と存在量がそれぞれ 80, 欲求部分量とその存在量がそれぞれ 12 とすると, 欲求比は  $A : B$  が  $100 : 80 = 5 : 4$  である。総価値は 180 であるとしよう。

希少性の比は  $(20/100) : (12/80) = 4 : 3$  であり,  $\alpha, \beta$  の欲求と希少性の複合比は  $(5 \times 4) : (4 \times 3) = 5 : 3$  となる<sup>21)</sup>。一方, 知覚された欲求に対応する物のみが富であることを, グラスランは次のように述べる。

欲求が少ししか存在しない素朴な状態であっても, 高度な文明によって無限に欲求が存在する状態であっても, 存在する諸欲求に対応する対象物のみが常に富の総量となる。だから, 富の総量は, 太古の時代におけるよりも現代の方が大きいということではない。

(Graslin [1767] 1911, 32-33)

つまり, 知覚され存在する諸欲求の総量 (la somme des besoins) と, 富の総量 (la masse des richesses), そして総価値 (la somme des valeurs) のそれぞれが, 1 つの単位として相応しているのであり, 欲求の種類数が増加すると, 各欲求の強度が弱まるのだと彼は説明する (Graslin [1767] 1911, 33 note 1)。

これを, 先の例の, 全ての対象物の総価値が 180 の社会に, もう 1 つ対象物が増えた場合として想定してみよう。対象物 1 と対象物 2 それぞれの量と部分量は変わらず, 新たに増えた対象物 3 の欲求量と存在量  $C$  をそれぞれ 60, 部分欲求量とその存在量  $\gamma$  を 6 とする。欲求比は  $A : B : C = 100 : 80 : 60 = 5 : 4 : 3$  であるから, 総価値 180 は  $A : B : C = 75 : 60 : 45$  に振分けられることになる。

希少性の比は  $20/100 : 12/80 : 6/60 = 4 : 3 : 2$  であり,  $\alpha, \beta, \gamma$  の欲求と希少性の複合比は  $(5 \times 4) : (4 \times 3) : (3 \times 2) = 10 : 6 : 3$  となる。

グラスランが主張した欲求と希少性の複合比は, 以上のように解釈できるが, 各対象物の量が増えた場合の部分価値の変化について, 彼は次のように述べる。

どのような物であれ個々の物の価値は, その種類の物の量が増加する割合に応じて減少す

21) それぞれの価値と量の数値が異なる場合には次のようになる。例えば, 対象物 1 と対象物 2 の欲求の序列比  $A : B$  は  $100 : 80$  のままで, 対象物 1 の量が 125, 対象物 2 の量が 120 に変換し,  $\alpha$  と  $\beta$  の各部分量はそれぞれ 20 と 12 のままとしよう。希少性の比は  $20/125 : 12/120 = 8 : 5$  となり, 欲求の序列を合わせた  $\alpha$  と  $\beta$  の複合比は  $(100 \times 8) : (80 \times 5) = 2 : 1$  となる。

る。…その欲求対象物の種類という関連での物の価値は、諸欲求が同じ割合である限り変化しないが、ある物の部分価値 (la valeur partielle) は、その諸部分の数量が増加するのに応じて、必ず減少することになる。なぜなら、ある全体のうちの 60 分の 1 の価値が、この同じ全体の 30 分の 1 の価値と同じ大きさということはあり得ないからである<sup>22)</sup>。

(Graslin [1767] 1911, 27)

グラスランの見解では、ある全体のうちの 60 分の 1 の価値の物の数量は、同じ全体の 30 分の 1 の価値の物の数量より必ず多く存在する。なぜなら、彼は続けて、

例えば、1 ミュイの小麦が 2 倍の量に増えたときには、その 1 ミュイ分は、元の価値の半分しか持たないだろう。そして、この 1 ミュイ分の小麦は、小麦全体とは同じ価値比のままでありながら、他の欲求対象物の諸部分との関係でも相対的に価値を減少させるだろう。

(Graslin [1767] 1911, 27)

と説明する。このことから彼は、対象物に新たな追加量に加わると共に、その追加量自体の価値もまた逡減していく限界価値の逡減の認識を明示したと解釈できる。

加えてグラスランは、生存に最も重要な「第 1 次的欲求対象物を所有していることを確認した人々は、便利で魅力的な物への更なる欲求を追い求める」(Graslin [1767] 1911, 40) ようになるから、「工業、美術工芸および科学の富は、部分的に捉えれば、第 1 次的必需品である土地生産物の富よりも大きな価値となることもある」(ibid., 56) と述べる。

また、空気や光や水のような物についての価値に対するグラスランの見解は、次のようになる。これらの物は、ふつうは限りなくふんだんに存在するため、各人が知覚できる絶対価値しかなく、その個々の部分の量は、全体から見ればゼロに近いほどごくわずかで、相対価値や市場価値もなく、富と呼ぶのは適切ではない。しかし、

もし、何らかの希少性か、あるいは、欲求対象物の量と欲求の大きさとの間に、もっぱら何らかの比率があるとすると、最下位の対象物にありがちなことだが、例えば、大海原の

22) グラスランのこのような表現について、山川 (1968, 234, 他) と、米田 (1998, 171, 他) は、グラスランは種類のな全体価値を部分量で割った平均価値が相対価値を決定するとしていて、限界価値の概念は見出せないと述べる。その理由として、米田は、グラスランが部分量の連続的変化の着想を持たなかったことを挙げている (米田 2005, 305)。確かに、グラスランが「60 分の 1」などの分数で表現している箇所では、そのような解釈も可能であることは理解できる。しかし、少なくとも彼は平均価値という表現は使っておらず、また、「小麦の量が 1 ミュイから 2 ミュイに増加する」という表現は、断片的ではあるが連続を意識した可能性も否定できない。したがって、その 2 倍になった小麦が価値を半分減少させる例では、既存分量だけでなく、追加的な増量分に対しても、主観価値の減少を認識しているという見方もできる。この点については後出の IV.4 項で再考するが、米田は、グラスランが「価値のパラドックス」を扱っている記述については、限界効用の概念を読み取ることは不可能ではないとも述べている (米田 2005, 304, 311-12)。

船の中で、または砂漠の中で、このような富の価値にはすぐに気付くだろうし、他の全ての富と同じように、欲求と希少性の度合に複合的に比例する比率であることがわかるのである。  
 (Graslin [1767] 1911, 70)

### 3. 富の序列——グラスラン表——

グラスランは、文明や科学の発達によって欲求が増えることで、富全体の価値がどのように主観的に振り分けられるのかを、前述した富の序列において考察している。彼は、

富の総量を構成している欲求対象物は、互いに欲求と同じ比率の中で存在する。それゆえ、〔新たな欲求対象物が加わることによる〕価値の新たな序列もまた、富の総量に相対的に形成されることになる。最も重要な欲求対象物はその価値を減らし、便利で魅力的な対象物の新たな価値に、その全体の中の場所を譲ることになる。だが、それらは同じ比率で減少しているであろう。  
 (Graslin [1767] 1911, 36, [ ] 内は引用者)

と述べ、その富の序列の例を、表 1 と表 2 (Graslin [1767] 1911, 37, 38) のように示した。

表 1 は欲求対象物が 4 つの場合、表 2 はそれが 10 に増えた場合である。グラスランは便宜上、富の総量に 1000 という価値の度合を与え、各欲求対象物に対し、相互に異なる比率で割当てて

表 1 グラスラン表 (欲求対象物が 4 つの場合の富の序列)

	度合	富の総量
第 1 の欲求対象物	400	} 1000 の価値の度合
第 2 の欲求対象物	300	
第 3 の欲求対象物	200	
第 4 の欲求対象物	100	

表 2 グラスラン表 (欲求対象物が 10 に増えた場合の富の序列)

各欲求対象物から 引かれる部分	富の総量
第 1 .....80.....320	} 800
第 2 .....60.....240	
第 3 .....40.....160	
第 4 .....20.....80	
200	} 1000 の価値の度合
第 5 .....60	
第 6 .....45	
第 7 .....40	
第 8 .....30	
第 9 .....15	
第 10.....10	200



表 4 メンガー表 (配置変換)

I	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0
II	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	
III	8	7	6	5	4	3	2	1	0		
IV	7	6	5	4	3	2	1	0			
V	6	5	4	3	2	1	0				
VI	5	4	3	2	1	0					
VII	4	3	2	1	0						
VIII	3	2	1	0							
IX	2	1	0								
X	1	0									

ように、各対象物の数量が増えたときの解説は詳しかったが、各対象物の種類数が一定のときに、その量の変化に対して主観的価値がどう漸進的に推移するかについての解説への意欲が足りなかった<sup>23)</sup>ことは明らかであり、それがメンガーとの違いでもある。

また、このような展開を試みても、第1から第10のすぐ右の、縦に並んだ320, 240, …, 10という各対象物に割当てられた価値の数値自体が不規則な減少の設定であり、それらをグラスランの記述に合わせて2分の1, 3分の1, …, 10分の1にする過程で概数にしたため、表4のメンガー表の規則的でシンプルな数値での設定のようににはならないが、同じ数値は同じ価値を持つというメンガー表への展開の可能性を、グラスランの主観価値理論は内在しているという解釈ができよう。

もちろんグラスラン自身は表3のような形を残さなかったから、メンガーによる表4のような限界効用逓減概念の表明(1871年)までには、この後100余年を要すことになった。それでも、グラスランはメンガーの近くまで到達していたのである<sup>24)</sup>。

#### 4. グラスランの市場観

グラスランにとって欲求対象物とは、生活資料や奢侈品などの実物だけに限られるわけではなく、労働そのものも欲求対象物であった。なぜなら、自分が欲しい物と交換するための実物を所

23) グラスランは、物の数量の増減による価値の変化についてこれ以上述べると、著述の目的から離れてしまうと説明する(Graslin [1767] 1911, 28)。グラスランの目的は、本節1.に述べた。

24) 実際、一橋大学社会科学古典資料センターのメンガー文庫には、中表紙等にメンガーの筆跡と思われる書き込みのある、グラスランの『分析試論』が所蔵されている。よって、メンガーが『分析試論』を手にとった可能性、そして、グラスラン表から何らかの示唆を受けた可能性は否定できないが、現時点ではそれ以上の推測は不可能である。

有できない貧者にとって、最も重要な欲求対象物を得るための唯一の手段は、彼自身の労働を差し出すことであり、それによって彼は必需品や必需品と交換するための貨幣を手に入れるのに対し、他方の富者にとっては、労働こそが必要な欲求の対象だからである。こうして、労働も他の欲求対象物と同じように、欲求と希少性の度合によって相対価値を持ち富の序列に加わることを、グラスランは次のように述べる。

貧者が第1次的な欲求対象物に対して持つ唯一の権利は、彼の労働にある。労働こそが富者の欲求の対象となり、この理由によって富の序列に加わる。そして、彼は第1次の欲求対象物と、あるいは、彼の労働という対象物について表示するだけの貨幣賃金と交換する。それゆえ、その労働は、他の全ての欲求対象物と同様に、〔労働量が増加すれば〕富の総量に対する相対価値の減少を必然的に被るだろう。

(Graslin [1767] 1911, 46, [ ]内は引用者)

労働ばかりでなく、グラスランは、技術、工業、商業も、それら自体が欲求と希少性の度合に応じた交換価値を持つ富だと考えた。国家行政もまた、欲求と希少性の度合に応じた交換価値を持つのであり、国家は、行政において雇用する人員の生計を満たすための欲求対象物と、保護、国外的安全、国内の取締り、国民の権威など、国民に還元するものとを交換すると見なすのである (Graslin [1767] 1911, 48)。しかし、栄光や名誉は欲求対象物であるが、同一人物にのみ交換可能であり、複数の人々にとっての共通の価値を持たないから、富の総量には入らないとする。

またグラスランは、文明が進んで人々が贅沢を好むようになり新たな欲求対象物の数が増えると、元々存在していた対象物の過剰分は価値を失うが、一国内での過剰対象物は、他国に存在する欲求との交換によって富となり得ることを、次のように説明する。

最重要の必需品である食糧の過剰部分は、農業国にとって諸外国の欲求に相応することによってしか富とはならない。この外国の欲求なしでは、国内の欲求の大きさを越える量には全く価値がない。

(Graslin [1767] 1911, 123)

つまり、国内の必需品生産は自然任せで不安定であるが、欲求の大きさを越えた過剰分の価値を他国の欲求の内に絶えず求めることで現実の富にするのである (Graslin [1767] 1911, 126)。富の序列では希少であることが豊富であることに優るが、この2つの性質の均衡または折合いの中に、国家の富は存在するのである (ibid., 125)<sup>25)</sup>。

このように、グラスランは、個人の価値観や交換論にだけでなく、国家行政や対外貿易などにも、主観に基づく相対価値を想定し、それらが主観的欲求と客観的希少性とに基づいて機能する

25) グラスランの均衡概念を特徴として挙げるのは Desmars ([1900] 1973), Faccarello (2009) であり, Orain (2006) はそれをワルラス的だと指摘する。また, Dubois (1911) がグラスランをリカードの先駆者と位置付ける (p. ix) のは, おそらく比較優位の発想をグラスランの中に見たのであろう。

ことを提示し、租税は国家の行政サービスとの交換物であるという租税論に発展させる。

#### IV チュルゴとグラスランの関連性

以上でチュルゴとグラスランそれぞれの価値理論の概要を示した。それらを踏まえ、同時代に並行して主張し合った彼らの主観価値理論の接点と相違点を、富の概念、個人的な絶対価値、交換における相対価値、そして、限界価値概念の認識の4点について比較する。

##### 1. 富

グラスランは「全ての欲求対象物の中で、欲求と希少性に応じて相対価値を持つ物が富である」と主張する一方で、「フィジオクラートは純生産物だけを富と見なしている」と指摘した (Graslin [1767] 1911, 24) が、これらに対して、チュルゴは、欲求の充足に充てられる全ての財のうち、取引可能な財、または価値を持つ財が富であると述べる。そして、土地生産物のうち、土地所有者の収入に当たる純生産物だけでなく、費用部分も富であるが、費用部分は自由に処分し得ない富であり、土地所有者にとっても国家にとっても収入ではないから、課税できないと反論した。また、純生産物は富のうち土地所有者の収入の部分であるとした (Turgot [1767] 1909, 630-32)。チュルゴに配慮すれば、富と呼ばれる範囲の定義付けについてはグラスランの誤解があったと言える。それでも、チュルゴもこの時点ではグラスランと同様に、富は交換可能な欲求対象物であると解釈していることになる<sup>26)</sup>。

しかし、この定義に至るまでのチュルゴの富についての見解は必ずしも一貫しているとは言えず、『プラン』では、「人間の数」と「有用物の生産」を富として定義しており (Turgot [1753-54] 1909, 377)、『諸考察』では、土地以外のあらゆる物を「動産の富」と呼び、蓄積された動産の富が資本であるとするに留まっている (Turgot [1766] 1909, 562-63)。いずれの見解にも「欲求充足」という概念が含まれておらず、『価値の貨幣』での定義との関連は薄い。

このように、グラスランの論文を知る直前までのチュルゴの解釈はかなり異なっていたことを考えると、批判した『分析試論』から、「欲求の充足に充てられ、相対価値を持つ」というグラスランの富の定義を、チュルゴは自身の理論の中に採り込んでいると言える。

##### 2. 絶対価値

チュルゴは『プラン』で、「使用する (user) ということこそが人間が自分の欲求対象に対し

26) 富についての定義付けは同じだとしても、チュルゴは、土地生産物全体から再生産に必要な経費を控除した余剰である純生産物が、土地所有者にとって自由に処分できる収入であり、これが唯一の徴税対象だとする (Turgot [1767] 1909, 630-31)。一方、グラスランは富全体を徴税対象だとする (Graslin [1767] 1911, 8)。この徴税対象の認識の違いから現れる、2人が実現しようとする税制度観は、全く異なるものとなる。



て持ち得る権利の最初の段階であり、人間はこの権利を自然から得ている」(Turgot [1753-54] 1909, 380) と述べ、使用価値を物に対する人間の原初の関係として挙げる。『諸考察』では、孤立人にとっての使用価値に相当する記述はない。

その後の『価値と貨幣』で提示される尊重価値が絶対価値として提示されるが、その尊重価値の3要素として、まず、人間の欲求と関連する物の適性の存在、次に、その欲求の必要の切実さの程度による効用の序列において、ある物が欲求を充足させるための効用を他の物より優位に持つことを示す物の卓越性<sup>27)</sup>の認識、そして、欲求対象を入手する困難さである希少性を挙げる(Turgot [1769?] 1909, 84-86) が、これらの概念は欲求・効用・希少性に集約できよう<sup>28)</sup>。

『諸考察』までのチュルゴには、尊重価値のような主観価値の定義や、「効用の序列」(ordre de utilité) という概念はなく、グラスランの『分析試論』の影響、とりわけ「富の序列」(ordre des richesses) の概念に着想を得たのは明らかであろう。

また、チュルゴは、人間に必要な対象物全体は広範で多様であっても、「欲求の総量」(somme de besoin) は限定的であると述べる(Turgot [1769?] 1909, 87) が、これはグラスランが示した「欲求の総量」(somme des besoins) と一致する。

そして、チュルゴによれば、自らの欲求を満足させることができる「能力の総量」(somme totale des facultés)<sup>29)</sup>とは、人間の「限定された資本」(capital renferme) であり、その資本全体が「享楽の総量」(somme de ses jouissances) に釣り合わなければならない(Turgot [1769?] 1909, 87-88) と説明する。つまり、チュルゴは欲求と資本・能力(富)と享楽(価値)が、それぞれ総量として相応することを示したが、これは、グラスランが、富と欲求と価値それぞれ総量が互いに1つの単位の中で相応すると、先立って述べたことと同じ構想である<sup>30)</sup>。

さらに、チュルゴは、尊重価値とは、ある人の能力全体のうち、その欲望を満たすのに用いる部分的な能力であり、分母に能力全体、分子に該当する部分的な能力という分数によって表示されると述べる(Turgot [1769?] 1909, 88)。しかし、これも、グラスランが先行して直接価値が「富の

27) チュルゴは、この卓越性(excellence)という語他に優越性(supériorité)という語も用いている。前者は種々の富の中からある欲求充足のために選ばれる性質であり、後者は交換の根拠として、相手が差し出そうとする物に自分が差し出そうとする物より大きな価値を認識することを表すために用いている。

28) チュルゴとグラスランが挙げたこれらの条件は、後にメンガーがMenger ([1871] 1968) で述べた財や価値の定義に近い部分がある。実際、メンガーはチュルゴの『価値と貨幣』を参照したことを明示している(ibid., 80/訳69 note)。

なお、この箇所のチュルゴの記述はやや複雑で曖昧なため、3要素の解釈が分かれている。本研究と異なる解釈には、例えば、手塚(1933)の「適正・欲望・評価」、山川(1968)の「適良性・卓越性・希少性」、馬渡(1997)の「効用・卓越性・希少性」、川俣(2010)の「欲求・通時性・希少性」がある。

29) facultéは人間の具体的な能力だけでなく、資力・経済力という意味も持つことを考慮すると、capitalとfacultéが対応していると理解できる。チュルゴは敢えてfacultéという語を用いて『諸考察』との一貫性を示すことで、グラスランとの類似性からの回避を試みたのではないだろうか。

30) この点の指摘のみが、手塚(1933)の「証明」であった。

総量に対して欲求対象物の各々の一部分が持つ比率」(Graslin [1767] 1911, 33 note 1) であると表明しており、チュルゴの尊重価値は全体における部分比率の観点からもグラスランの直接価値に類似している。

しかし残念ながら、チュルゴが「能力」という概念を持ち出し、「ある人の能力全体のうち、その欲望を満たすのに用いる部分的な能力」だと述べた時点で、彼は期せずして主観価値論から離れ、労働価値説に舵を切ってしまうことも指摘できよう<sup>31)</sup>。

『諸考察』までのチュルゴにも、確かに、欲求と希少性についての記述はあるので、彼自身の主観価値理論の片鱗 (Turgot [1753-54] 1909, 380-81; Turgot [1766] 1909, 552-53) から自ら発展させたと思われるかもしれない。しかし、『諸考察』までのチュルゴが『価値と貨幣』で示した尊重価値等の概念へと飛躍させるには、グラスランの影響を考慮しなければ、その変化が不自然である。つまり、チュルゴの尊重価値は、グラスランの直接価値 (絶対価値) の概念に負っているとと言えるのである<sup>32)</sup>。表 5 に彼らの概念の構造をまとめた。

表 5 グラスランとチュルゴの類似性

グラスラン (1767)	チュルゴ (1769?)
直接価値の 3 要素 ・ 欲求に依存する物の属性 ・ 希少性 ・ 富の序列における欲求の度合	尊重価値の 3 要素 ・ 欲求に関連する物の適性 ・ 希少性 ・ 効用の序列における卓越性
富の序列で一致する概念 ・ 欲求の総量 ・ 富の総量 ・ 総価値	効用の序列で一致する概念 ・ 欲求の総量 ・ 享有の総量 ・ 能力全体
直接価値とは、富の総量に対して、各欲求対象物の一部分が持つ比率	尊重価値とは、ある人の能力全体のうち、ある欲求を満たすのに用いる部分の比率

### 3. 交換価値

交換の発生について、グラスランはこう述べる。

人間の欲求の多様性と、それらの欲求対象物間における配分の不均衡とから、必然的に交換が生じ、各々が欲求を持つ物を手に入れるために、不要な物を差し出すだろう。だが、欲求対象物は異なる価値を持つから、価値に対応する価値を与えるために、交換の際にはその違いについて考慮することになる。それには、物の価値を比較しなければならず、こ

31) メンガーも、このチュルゴの記述に労働価値に近いものを見ている (Menger [1871] 1968, 108 / 訳 94)。

32) 「チュルゴの価値理論はグラスランからいくつかの点で借りている」(Dubois 1911, xxix) として、デュボワも、孤立人にとっての尊重価値や、分母に能力全体、分子に対応部分量を持つ分数などの概念について、チュルゴがグラスランから借用していることを指摘している。

の比較の結果、物と物の間における相対価値と呼ばれる関係が生じる。つまり、それぞれの物は、他の全ての物との関係でその価値を持つことになろう。(Graslin [1767] 1911, 26)

交換価値についてのグラスランの見解は、ある直接価値と別の直接価値が比較された比率が相対価値（または市場価値）であり、「相対価値とは、富の総量を構成するすべての諸部分に対する個々の物の比率であり、また、総価値に対するそれぞれの2つの価値の比率」(Graslin [1767] 1911, 33 note 1) というものである。

一方、『価値と貨幣』でのチュルゴの交換についての説明では、2個人の間での2物の尊重価値、つまり4つの尊重価値を比較する。それぞれ相手が持つ入手したい物と自分が手放そうとする物の尊重価値を比較し、入手したい物の方の「尊重価値に優越性 (supériorité)」を与え、互いにとってその優越した2物の尊重価値からの差が等しいところで交換が成立する。つまり、「この差の半分を大きい方の価値から引き、それを小さい方の価値に加えれば、双方は等しくなる」と説明するこの平均尊重価値が交換価値となり、これを評価価値と呼ぶ (Turgot [1769?] 1909, 91-92)。チュルゴは『プラン』から既に、このように入手する物と手放す物とに分ける考え方を持っている<sup>33)</sup>。またチュルゴはこの評価価値を、2個人が2物のために用いる能力の分量の合計と、彼らの能力全体の合計との比率であるとも言い換える (ibid., 92)<sup>34)</sup>。

ところが、この記述の後、チュルゴは自身で肯定的に説明して用いたこの分数表示について、「基本単位としての分母が評価できない」のに「ある対象の価値が人間の能力の200分の1に相当すると、なぜ言えるのか？」と自ら否定し、人間の能力を総計したり、価値をそれ自体で表したりすることは不可能だと、グラスランの記述 (Graslin [1767] 1911, 34 note) への批判を仄めかしながら述べる (Turgot [1769?] 1909, 94)。そして、自分が与える物と受け取る物の価値の比率を、基準となる価格として通用させることで、「価格は常に価値の表明」(ibid., 95) になることを、次のように説明する。

さまざまな価値は他のさまざまな価値と比較することによって測定される。どんな比較方法においても、自然から与えられた基本単位が存在するのではなく、慣習上の任意の単位

33) チュルゴのこの4つの尊重価値の観察は特徴的ではあるが、結局、評価価値の決定は、自分が欲する相手の所有物に対する「優越した2つ」の尊重価値どうしを比較するのみとなる。

34) チュルゴのこの表現は次のように具体化できる。例えば、個人1と個人2が100ずつの能力を持ち、個人1が所有する物1に対して個人2が「5」という優越した尊重価値を、個人2が所有する物2に対して個人1が「3」という優越した尊重価値を与えたとしよう。2人の能力の合計は200、2人のそれぞれの優越した尊重価値能力の合計は5+3で8であるから、 $8/200 = 4/100$ から平均尊重価値即ち評価価値は「4」ということになる。

グラスランについては、本論III.2項で、「 $A/(A+B) : B/(A+B) = A : B$ 」と「 $\alpha$ の量/Aの量： $\beta$ の量/Bの量」との二重の比であると説明したが、ここでのチュルゴの分数表示の「能力」をグラスランと比較して表せば、「 $\alpha/(A+B) : \beta/(A+B)$ 」を指していることになる。ここにも、チュルゴのグラスランへの接近が現れている。

があるだけである。交換の場合は、2つの等しい価値があるので、一方を表明すれば、もう一方の測定が可能となるから、この測定の根本として、言い換えれば、価値の比較の尺度を構成することになる諸部分の計算の要素として採用する任意の単位を認める必要がある。…2人の交換者の一方が、自分の価値尺度の単位として自分が与える物の一定部分を用い、彼が受け取る物の決められた量に対して、彼が与える量を、数で、この単位の分数で、表すことになるだろう。この量が彼にとっての価値を表明することになり、また、彼が受け取る物の価格となるだろう。つまり、価格は常に価値の表明なのである。

(Turgot [1769?] 1909, 95, 傍点は原典による)

価値と貨幣の関連について、グラスランはチュルゴに先立ち、貨幣数量説も交えてこう述べている。

貨幣は、交換において提示される物の代表的・慣習的な証に他ならず、また、部分的に捉えるなら、実際の富の希少性に対して独自の比率を持つ。それは、貨幣全体の大きさに比例し、貨幣が表示する富の量に相対的な比率である。…表示価値の総量は、表示された価値の総量よりも多いわけでも少ないわけでもないから、もし、貨幣が2倍になれば、物の価格や貨幣との相対価値は、2倍になるまで少しずつ増加するだろう。なぜなら、表示価値の総額は、表示された価値の総量より多い訳でも少ない訳でもないからであり、この2つの価値は常に物の相互間の相対価値で決まるそれらの比率において、均衡していなければならぬからである。

(Graslin [1767] 1911, 53-54)

なお、チュルゴは交換について、等価の利益 (avantage equivalent) を交換する等価交換であると述べる (Turgot [1753-54] 1909, 379; Turgot [1769?] 1909, 92) が、グラスランは、交換される物どうしの諸価値が等価となるように行われる (Graslin [1767] 1911, 114) という等価交換だけでなく、当事者個人の主観的な比較の下では、下位の欲求対象物と、上位となる欲求対象物との交換である (ibid., 287) という不等価交換の見解もチュルゴの「尊重価値の優越性」に先立って示している。

#### 4. 限界価値逡減の認識

まず、グラスランの限界価値とメンガーの限界効用との関連を論じ、その後、チュルゴの限界概念との比較を行う。

グラスランの「1 ミュイの小麦が2倍の量に増えたときには、その1 ミュイ分は、元の価値の半分しか持たない」(Graslin [1767] 1911, 27) という表明から、「追加された1 ミュイ分も、1 ミュイ分しかなかったときの2分の1の価値しか持たず」、3倍になれば「追加された1 ミュイ分も、元の3分の1の価値しか持たない」と解釈して、表3への発展を試みたが、その追加部分の価値が逡減する様子を図1に示す。

グラスランの仮定のように整数倍で増える場合、その追加部分の価値の逓減については、図1のように平均価値と限界価値が一致して減少し、双曲線状のグラフになる。結果として、「種類的な全体価値を部分量で割った平均価値が相対価値を決定している」(注22参照)と解釈される可能性はある。しかし、見方を変えれば、総価値を一定とする制約を置いたグラスランは、数量が増加すれば各部分価値が減少することを用いて、追加部分の限界価値が逓減することを提示しているという解釈が可能である。

その第1の理由は、グラスランは平均値や平均価値という用語の使用や、「種別価値を具体量で割った商」(山川1968, 234)という記述はしていない。だから、彼が平均価値の認識を持っていたとは言い切れないはずである。第2の理由は、彼の「物の部分価値は、その物の諸部分の増加に応じて、必ず減少する」(Graslin [1767] 1911, 27)、「欲求の数量が増加することは欲求の充足感を得ることへの愛着が弱まること」(ibid., 33 note 1)という記述からもわかるように、数量の増加に対して限界価値が逓減することを明示しているからである。

つまり、グラスランは、「どのような物であっても個々の物の価値は、その種類の物の量が増加する割合に応じて減少する」(Graslin [1767] 1911, 27)ことを何度も繰返すほど、限界価値逓減の認識を主張しようとしていたのである。彼は価値を一定と想定することで、それが数量の増加に伴って細分化されることを比喩的に用いて、増加の追加的部分価値が同時に逓減することを提示したと推測できる。

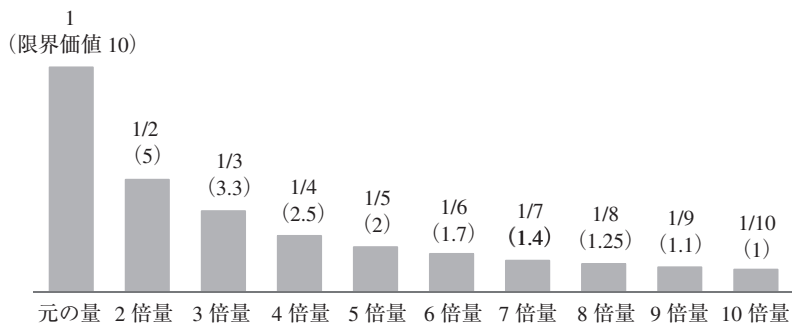


図1 グラスランの平均価値あるいは限界価値の逓減

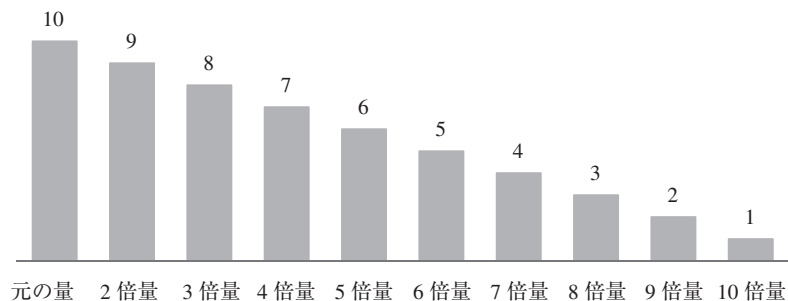


図2 メンガーの限界効用逓減

図2は、メンガー表の1財の限界効用が逡減する様子を示した。メンガーの場合、新たな追加分の限界効用が10, 9, 8, 7, 6, …と減少するが、グラスランの場合を示した図1でも、仮に10という価値から減少することになると、10, 5, 3.3, 2.5, 2, 1.7, 1.4, 1.25, …, (概数を含む)が限界価値となる。

しかし、もちろん、グラスランが認識していたのは素朴な限界概念である。彼は、どのような物であっても個々の物の価値は、その種類の物の量が増加する割合に応じて減少するという表明を明示したが、彼はそれについてさらに敷衍するより、グラスラン表で象徴されるように、富の序列の中で種類価値の数が増えた場合における各対象物間の価値の比率の変化を示すことの方に、より関心を持っていた。そのため、同一物の追加数量に対する限界概念の提示には、それ以上立ち入らなかった。

一方のチュルゴは、『価値と貨幣』で、限界概念よりも、むしろ、孤立人の場合と2個人間の場合に分けた交換プロセスを詳述した。その中で、グラスランの限界価値の示唆に対応するものとしては、

いろいろな物の評価は、全く固定したものではなく、人間のさまざまな欲求の変化に応じて刻々と変化する。未開人が空腹のときには、彼はどれほど上等なクマの毛皮より、鳥の1つの肉片の方を尊重するが、空腹が満たされ寒さを感じるようになると、クマの毛皮の方を尊重する。  
(Turgot [1769?] 1909, 85)

という例示が、まず挙げられる。これ以上には明確に述べられていないものの、この記述こそが『価値と貨幣』におけるチュルゴの限界効用逡減の認識を仄めかす箇所だと考えられている<sup>35)</sup>。

しかし、物の評価が「人間の欲求の変化に応じて刻々と変化する」という記述のみでは、追加量の価値が逡減することの明示とはなり得ない。なぜなら、この記述における「欲求の変化」とは、欲求が飽和したか否かを示しているのであり、1つの欲求が飽和すると別の欲求対象物へと欲求の種類間での移動が起こることが述べられたに過ぎないからである。この点において、グラスランは限界概念については、明らかにチュルゴより1歩先んじていたことになる。したがって、ガリアーニが「われわれの感情は、食事や睡眠などの第1次の感情が満たされるや否や、同じ強さの別の感情が生じる。つまり、人間は、ある欲望が収まるとすぐに、別の欲望が同じ強さで生じて刺激されるように作られている」(Galiani [1751] 1803, 61)と述べていた主張の域を、チュルゴが出ているとは言えない<sup>36)</sup>。

即ち、チュルゴは、グラスランが「どのような物であっても個々の物の価値は、その種類の物の量が増加する割合に応じて減少する」、「1 ミユイの小麦が2倍の量に増えたときには、その1

35) 川俣(2010)では、チュルゴのこれらの記述から補助的公理を定式化して、限界効用逡減のコンセプトの内在性を引き出している。

36) それでも、シュンペーターは、チュルゴが生産理論においては限界分析を用いて生産の逡減性を指摘(Turgot [1767] 1909, 645)していることを評価している(Schumpeter 1954, 544 / 訳 471)。

ミュイ分は、元の価値の半分しか持たない」と示したような、限界効用逓減に結びつく具体的表明までは『価値と貨幣』に盛り込まなかったわけで、チュルゴの認識には限界効用の片鱗は存在しないのである。

また、チュルゴは、必要以上に余分に所有する物を交換のために利用することを次のように記述する。

自分が漁で捕獲した中から、腐らない程度の数日分の魚だけを取り、残りは不用だとして捨ててしまう可能性のあった人でも、その魚が、自分で身に付けるための毛皮を手に入れるのに役立つことが分かると、それを尊重するようになる。要するに、彼にとって、この余分だった魚が、これまで持っていなかった1つの価値を持つことになるのである。

(Turgot [1969?] 1909, 89)

これは、人間の欲求によって物の価値が変化することと、交換の動機の発生の例としてチュルゴが示した例であるが、グラスランが先行して示した次の記述を見逃すべきではない。

各々の欲求対象物は、欲求を持つ人にとっては直接の富であり、欲求を持たない人にとっては間接的な富である。この対象物の価値は、当事者にとって交換価値となる。つまり、ある人が100 ミュイの小麦を持っていても10 ミュイしか欲しくないなら、あとの90 ミュイは交換のための価値しか持たないということである。

(Graslin [1767] 1911, 45)

以上のように、チュルゴが学説史的に評価を受けて採り上げられる『価値と貨幣』での主観価値の記述は、実は、グラスランが『分析試論』で既述した内容に対応させ得るほど、グラスランから多くの影響と示唆を得ている。しかしながら、フィジオクラシーの費用理論の立場から離れていないチュルゴにとっては、労働も、工業も、商業も、行政も、外国との交易も、欲求と希少性に基づく対象物と見なすグラスランの主張は、主観価値的思考の範疇の中では共感し得たとしても、現実的な政策への理論根拠としては、到底受容することは出来なかったであろう。

## V 結 論

チュルゴも、また、グラスランも、共に主観価値理論の発展の中に確かな足跡を残した。しかし、彼らに対する後世の評価は異なるものとなっていた。

自らをケネーとグルネの両者の弟子<sup>37)</sup>と認めていたチュルゴは、『プラン』、『諸考察』までは、グルネの自由競争的市場観を持ちながら、フィジオクラシーの費用価値理論を説いた。彼はまた、取引者が交換を行う際の動機については主観的記述も用いて論じていた。ところが、その後、グラスランの概念が組み入れられた『価値と貨幣』でのチュルゴの主観価値理論は、『プラン』、『諸

37) チュルゴの1776年2月20日のデュボン宛書簡。

考察』までの主観的記述との隔たりを指摘されることなく主観価値理論が明示されたことと、限界効用逓減の認識の有無が議論されることによって、学説史的地位を付されている。ところが、チュルゴに示唆を与えたグラスランの主観価値理論は、かなり限定的にしか採り上げられることがなかった。

本論文では、手塚（1933）や山川（1968）の主張を継承しながら、チュルゴの著作での変化にグラスランを関連付けて、彼らの主観価値理論を並行して論じた。結果として、チュルゴについては、彼がグラスランの主観価値理論を批判しながらも、その枠組みを自らの理論へ組み込んだことと、彼の効用概念がガリアーニと同程度に留まっていることを明らかにした。

一方のグラスランについては、経済全体を一貫して主観価値理論で捉えていたことを示し<sup>38)</sup>、またグラスランがメンガーに近い先駆性を持っていたとする解釈の可能性を指摘した。グラスランは、人間の欲求の総量と富の総量と総価値とが相応することを前提とした上で、人間が知覚できる欲求のキャパシティは一定の水準であるから、文明が進化して欲求の種類が増えると、それぞれの種類ごとに向けられる欲求や愛着の度合は薄まること、また、ある一物の数量が増えた場合も、欲求や愛着が薄まることで希少性が減少し、個々の部分価値が減少することを提示した。このグラスランの理論については、ある全体を数量で除した平均価値を交換価値と見なしているだけで、限界概念は持たないとする解釈もあるが、一定と想定した価値が数量の増加に伴って細分化されるという比喩を用いることで、限界効用逓減に近い概念の提示を試みたとも解釈できる。

メンガーが『国民経済学原理』において、主観価値の萌芽としてチュルゴの『価値と貨幣』を参照していたことは既述したが、以上のような事情を勘案すると、メンガーはチュルゴを通してグラスランを参照していたという構図が成り立つことになろう。更に、それだけにとどまらず、グラスランがメンガー表に近い概念を示唆していたという本研究で提示した解釈は、メンガーとグラスランとの関連も今後の研究課題に含まれることを意味しているのである。

（山本英子：早稲田大学大学院博士課程）

## 参 考 文 献

Brewer, A. 2010. *The Making of the Classical Theory of Economic Growth*. London: Routledge.

38) Desmars ([1900] 1973) では、古典派の先駆者としてグラスランが論じられている。

「グラスランの学説は、すべて価値概念の上に基礎を築いている。彼は疑いなく、経済学全体をこの価値という概念に立ち返らせた最初の学者である。この点で、コンディヤックに9年先んじている」(Dubois 1911, x)。

「グラスランは租税の転嫁問題に対する洞察において、その同時代人の中でも優れていた」(Schumpeter 1954, 175)。

「ガリアーニであれチュルゴであれ、あるいはコンディヤックであれ、…グラスランの効用理論に比べれば、かれらの効用価値説は体系的ないし徹底性の点で十分ではない」(米田 2005, 322)。



- Desmars, J. [1900] 1973. *Un Précurseur d'A. Smith en France*. Paris: Société Anonyme du Recueil Général des Lois et des Arrêts et du Journal du Palais, NY: B. Franklin.
- Dubois, A. 1911. Introduction. In Graslin, J. J. L. [1767] 1911. *Essai Analytique sur la Richesse et sur l'Impôt*. Paris: Paul Geuthner, v–xxx.
- Erreygers, G. 1989. Turgot et le fondement subjectif de la valeur. *Cahiers d'économie politique*, 16–17. Le libéralisme économique. Interprétations et analyses: 231–51.
- Faccarello, G. 1992. Turgot et l'économie politique se sualiste. In *Nouvelle histoire de la pensée économique*, ed. by A. Béraud and G. Faccarello, vol. 1. Paris: La découverte, 254–88.
- . 1998. Turgot, Galiani and Necker. In *Studies in the History of French Political Economy: From Bodin to Walras*, ed. by G. Faccarello. London: Routledge, 120–95.
- . 2008. Galimatias simple ou galimatias double?: Sur la problématique de Graslin. In *Graslin Le temps des Lumières à Nantes*, ed. by P. Le Pichon et A. Orain. Rennes, France: Presses Universitaires de Rennes, 89–125.
- . 2009. The Enigmatic Graslin: A Rousseauist Bedrock for Classical Economics? *European Journal of the History of Economic Thought* 16(1): 1–40.
- Faccarello, G. and P. Steiner. 2012. Philosophie économique and Money in France, 1750–1776: The Stake of a Transformation. *European Journal of the History of Economic Thought* 19(3): 325–53.
- Galiani, F. [1751] 1803. Della Moneta. In *Scrittori Classici Italiani di Econoia Politica*, ed. by P. Custodi. Parte Moderna. Tomo III. Milano: Destefanis.
- Gide, C et C. Rist. 1926. *Histoire des Doctrines Économiques*. Paris: Société Anonyme du Recueil Sirey. 宮川貞一郎訳『経済学説史』東京堂, 1936–38.
- Graslin, J.-J.-L. [1767] 1911. *Essai Analytique sur la Richesse et sur l'Impôt*. Paris: Paul Geuthner.
- Groenewegen, P. D. 1983. Turgot's Place in the History of Economics: A Bi-centenary Estimate. *History of Political Economy* 15(4): 585–616.
- . 2002. *Eighteenth-century Economics: Turgot, Beccaria and Smith and their Contemporaries*. London: Routledge.
- Hutchison, T. 1988. *Before Adam Smith*. Oxford-UK and NY: Basil Blackwell.
- Jessua, C. 1991. *Histoire de la théorie économique*. Paris: Presses Universitaires de France.
- Kauder, E. 1965. *A History of Marginal Utility Theory*. Princeton, NJ: Princeton University Press. 斧田好雄訳『限界効用の歴史』嵯峨野書院, 1979.
- Maherzi, D. 2008. Introduction. In J.-J.-L. Graslin [1767] Réédition du text de 1911. *Essai Analytique sur la Richesse et sur l'Impôt*. Paris: L'Harmattan.
- Menger, C. [1871] 1968. Grundsätze der Volkswirtschaftslehre. *Gesammelte Werke*. Bd. 1, Tübingen: J. C. B. Mohr. 安井琢磨・八木紀一郎訳『国民経済学原理』日本経済評論社, 1999.
- Murphy, A. E. 2009. *The Genesis of Macroeconomics*. NY: Oxford University Press.
- Orain, A. 2006. « Équilibre » et fiscalité au Siècle des lumières: L'économie politique de Jean-Joseph Graslin. *Revue Économique* 57:955–81.
- . 2008 a. Jean-Joseph-Louis Graslin (1727–1790): Un itinéraire dans son siècle. In *Graslin: Le temps des Lumières à Nantes*, ed. by P. Le Pichon et A. Orain. Rennes, France: Presses Universitaires de Rennes, 29–86.
- . 2008 b. Graslin et les physiocrates: Les controverses sur la valeur, l'équilibre et la fiscalité. In *ibid.*, 127–45.
- . 2012. Graslin and Forbonnais, against the *Tableau Économique* (1767). In *Quesnay and Physiocracy: Studies and Materials*. Paris: L'Harmattan, 87–111.
- Perrot, J. 1992. *Une histoire intellectuelle de l'économie politique, XVIIe-XVIIIe siècle*. Édition de l'École des Hautes Études en Sciences Sociales.
- Quesnay, F. [1765] 1888. Le Droit Naturel. In *Œuvres Économiques et Philosophiques de F. Quesnay*, éd. par Auguste Oncken. Francfort: Joseph Baer, Paris: Juls Peelman, 359–77.
- . [1766] 1888. Du Commerce, premier dialogue entre M. H. et M. N.. Sur les travaux des artisans, second dialogue

- entre M. H. et M. N. In *Œuvres Économiques et Philosophiques de F. Quesnay*, ed. by A. Oncken. Francfort: Joseph Baer, Paris: Juls Peelman, 446-93, 526-54.
- Ravix, J.-T. et P.-M. Romani. 1997. Le « système économique » de Turgot. In *Turgot: Formation et distribution des richesses*. Paris: Flammarion, 1-63.
- Schumpeter, J. 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一・福岡正夫訳『経済分析の歴史 (上)』岩波書店, 2005.
- Smith, A. [1776] 1994. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, ed. by E. Cannan. NY and Toronto: Random House.
- Steiner, P. 2003. Physiocracy and French Pre-Classical Political Economy. In *A Companion to the History of Economic Thought*, ed. by W. J. Samuels, J. E. Biddle, and J. B. Davis. MA, Oxford-UK, Melbourne, and Berlin: Blackwell.
- Turgot, A. R. J. [1753-54] 1909. Plan d'un Ouvrage sur le Commerce, la Circulation et l'intérêt de l'argent, la Richesse des États. In *Œuvres de Turgot*, vol. I, ed. by G. Schelle. Paris: Alcan, 376-87. 津田内匠訳「商業、貨幣流通と利子、諸国家の富にかんする著述プラン」『チュルゴ経済学著作集』岩波書店, 1962, 19-27.
- . [1759] 1909. Eloge de Vancent de Gournay. In *Œuvres de Turgot*, vol. I, ed. by G. Schelle. Paris: Alcan, 595-623. 津田内匠訳「ヴァンサン・ド・グルネー賛辞」『チュルゴ経済学著作集』岩波書店, 1962, 41-60.
- . [1766] 1844. Les Réflexions sur la Formation et la Distribution des Richesse. In *Œuvres de Turgot*, Tome I, ed. by E. Daire. Paris: Guillaumin, 7-67. 津田内匠訳「富の形成と分配にかんする諸考察」『チュルゴ経済学著作集』岩波書店, 1962, 70-123.
- . [1766] 1909. Les Réflexions sur la Formation et la Distribution des Richesse. In *Œuvres de Turgot*, vol. II, ed. by G. Schelle. Paris: Alcan, 533-601.
- . [1767] 1909. Observation sur les Mémoires récompensés par la Société d'Agriculture de Limoges, 1. Sur le Mémoires de Graslin, 2. Sur le Mémoires de Saint-Peravy. In *Œuvres de Turgot*, vol. II, ed. by G. Schelle. Paris: Alcan, 626-65. 津田内匠訳「リモージュ農業協会から賞を授けられた諸論文にかんする所見 1—グラスランの覚書きについて 2—サン・ペラヴィの覚書きについて」『チュルゴ経済学著作集』岩波書店, 1962, 125-48.
- . [1769?] 1844. Valeurs et Monnaies. In *Œuvres de Turgot*, Tome I, ed. by E. Daire. Paris: Guillaumin, 75-93. 津田内匠訳「価値と貨幣」『チュルゴ経済学著作集』岩波書店, 1962, 149-63.
- . [1769?] 1909. Valeurs et Monnaies. In *Œuvres de Turgot*, vol. III, ed. by G. Schelle. Paris: Alcan, 79-98.
- 川俣雅弘. 1988. 「Ferdinando Galiani の希少性価値理論の歴史的位罫について」『三田学会雑誌』(慶應義塾大学) 81 (2): 137-55.
- . 2010. 「チュルゴの『価値と貨幣』における価値と価格の理論の公理的分析」『社会志林』(法政大学) 57 (3): 59-89.
- 小池基之. 1981. 「ケネーにおける『価値』と『剰余価値』」『三田学会雑誌』(慶應義塾大学) 74 (5): 47-61.
- 津田内匠. 1962a. 「J.-J.-Louis Graslin についての覚書き」『経済研究』13 (1): 80-84.
- . 1962b. 「解題—チュルゴの経済思想形成の過程に即して」『チュルゴ経済学著作集』岩波書店, 1962, 1-18.
- 手塚壽郎. 1933. 「心理的経済価値説の歴史的硏究の一節—チュルゴの Valeurs et monnaies の想源に就いて」『福田徳三博士追憶論文集』(小樽商科大学) 187-217.
- 中川辰洋. 2015. 「カンティヨン、ケネー、チュルゴ (I)」『青山経済論集』(青山学院大学) 67 (1): 187-223.
- 馬渡尚憲. 1997. 『経済学史』有斐閣.
- 山川義雄. 1948. 「十八世紀仏蘭西主観価値論の形成—ガリアニ・チュルゴ・コンジャック」『早稲田政経雑誌』(早稲田大学) 96:39-60.
- . 1960. 「チュルゴの価値の変遷について」『早稲田政経雑誌』(早稲田大学) 163:25-46.

——. 1968. 『近世フランス経済学の形成』世界書院.

山本勝市. 1928 「チュルゴの価値論」『内外研究』（和歌山高等商業学校）1（2）: 112-44.

米田昇平. 1998. 「グラスランの経済思想—効用価値説と累進課税の原理」『下関市立大学論集』（下関市立大学）41（3）: 165-91.

——. 2005. 『欲求と秩序』昭和堂.

## The Roles of A. R. J. Turgot and J.-J.-L. Graslin in the Subjective Theory of Value in the Late 18th Century

Eiko Yamamoto

### **Abstract:**

Turgot is known not only as a physiocrat, but also as the author of *Valeurs et Monnaies* (c1769?), in which he discusses the subjective theory of value: this work earned him a pre-eminent position in the field. Prior to Turgot's discussion, Graslin presented more detailed accounts of the subjective theory of value, providing logical arguments against physiocracy. In his *Essai Analytique sur la Richesse et sur l'Impôt* (1767), Graslin refuted physiocratic doctrines, especially the concepts of net product and productive/non-productive classes. While initially critical of Graslin's assertions, Turgot later adopted his views in *Valeurs et Monnaies*. Although Turgot contributed to the field of economics, he provided only an introduction to marginal utility, equivalent to Galiani's signs in *Della Moneta* (1751), because Turgot could not totally abandon physiocratic concepts. However, Graslin proposed that all economic activities and national policies should be considered in the context of the subjective theory of value. More fundamentally, he assumed that human capacity for awareness of desires and needs has always been constant and showed that an increase in the amount of objects would cause a decrease in their value. Preceding studies consider that Graslin expressed only average value and that he did not show the basis of marginal utility. Although, in his descriptions of value, there were possibilities to mislead, it is quite possible to interpret him a forerunner of the marginal utility theory and thus distinguish him from other authors of his era.

JEL classification numbers: B 11, B 31.